PSTM2025 in New Orleans　参加報告

仙台医療センター　形成外科・手外科　東北ハンドサージャリーセンター　伊師森葉

2025 年 10 月 9 日から 12 日までアメリカ合衆国南部に位置するニューオーリンズで開催されたアメリカ形成外科学会総会（Plastic Surgery The Meeting 2025）にて MOU 枠で E-poster 発表の機会を頂き、現地参加して参りました。口頭での発表の機会はありませんでしたが、現地参加することで多くの刺激を受けました。私の E-poster はプロバイオティクスが創傷治癒に与える影響に関する基礎研究の内容でしたが、実際学会へ参加してみると昨今の PRS 誌同様に BREAST や COSMETIC に関する演題の割合が非常に大きいことが印象的でした。

形成外科の国際学会参加もアメリカ本土への上陸も初めてで不安も多くありましたが、到着した空港でニューオーリンズへの留学経験のある慶應大学の鈴木悠史先生とお会いすることができ、すんなりとホテル、会場、夜の街へと繰り出すことができました。また、ペンシルベニア大学形成外科に留学されている出口綾香先生主催の日本人形成外科医の交流会にも参加させて頂き、異国の地で日本人に会える安心感を味わうとともに世界で活躍されている先生方からとても刺激を受けました。

ニューオーリンズは街の至る所で JAZZ の生演奏が行われており、とても賑やかなところでした。名物のジャンバラヤやベニエ、地元のビールであるアビータを堪能し、大変満足しました。行きの空港でアウターを紛失してしまうアクシデントに見舞われましたが、会場すぐそばのアウトレットモールで新調することができとても良い(?)思い出となりました。

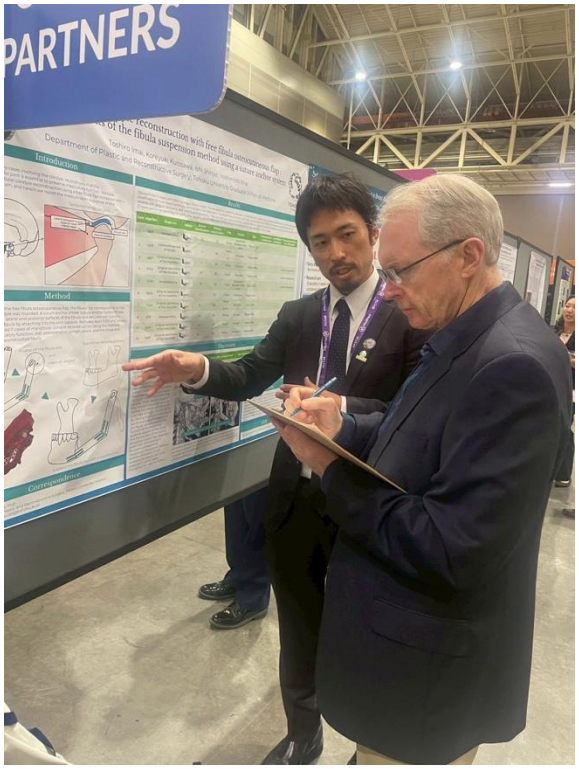
今回 PSTM2025 に参加し、今後は海外での積極的な発信をしていきたいと考える良いきっかけとなりました。このような貴重な機会を与えてくださった日形会国際委員会委員長の小川先生ならびに関係者の方々に深く感謝申し上げます。

Plastic Surgery The Meeting 2025 in New Orleans 参加報告

東北大学　形成外科　今井利郎

この度、アメリカ・ニューオーリンズで開催された“Plastic Surgery The Meeting 2025 (PSTM2025)”において、MOU 枠としてポスター発表の機会を頂きました。本演題では、当院で行った下顎頭を含む下顎骨区域切除に対する再建 10 症例をまとめて報告いたしました。日本形成外科学会国際委員会を通じ、このような貴重な機会を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

ASPS からは「金曜日の 15 時～17 時の間はポスター会場にいること」とのみ案内されており、当初は質疑に応じる程度と理解しておりました。しかし発表前日に、経験者の先生から「審査員が来た際には自らプレゼンテーションを行う必要がある」と伺い、当夜はホテルに帰ってから準備に追われ、ほぼ徹夜でした。結果として発表は滞りなく行うことができ、貴重な？経験となりましたが、来年以降参加される先生はご注意ください（こんなミスは私だけでしょうか)。



開催地であるニューオーリンズはジャズ発祥の地として知られ、街角の至る所で生演奏が行われており、歩くだけでも楽しむことができました。治安について懸念しておりましたが、観光地だけ歩いている分には危険を感じませんでした。名物料理であるジャンバラヤやガンボ、ベニエなども堪能し、学会の合間も存分に楽しむことができました。

海外学会には以前から関心があったものの一歩を踏み出せずにおりましたが、今回の参加は大変充実した経験となりました。改めて、この機会を与えてくださった日本形成外科学会国際委員会委員長の小川先生ならびに

関係各位に深く御礼申し上げます。

PSTM2025 参加報告

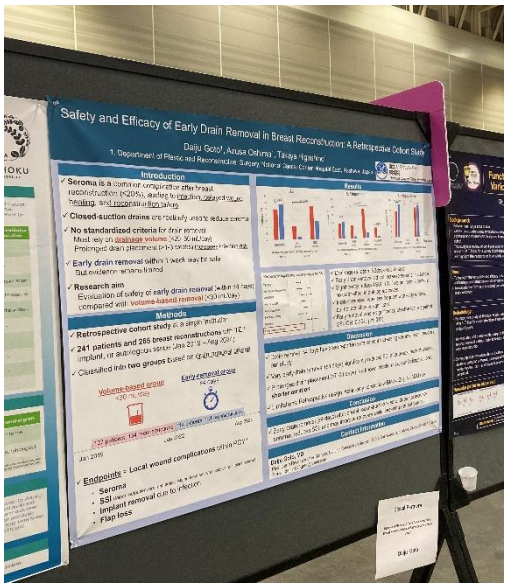
国立がん研究センター東病院　形成外科　後藤大十

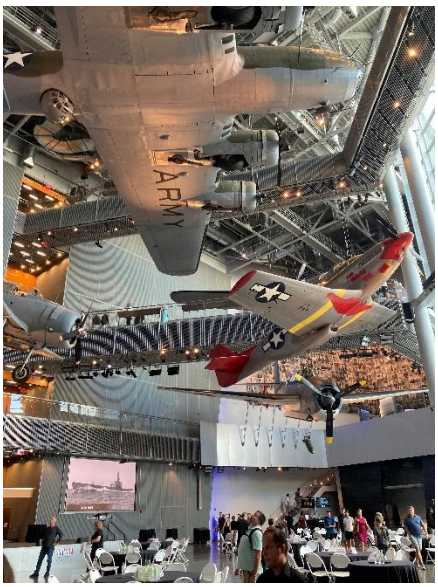
今回、PSTM2025 にて e-poster および現地での physical poster 発表を行う機会をいただきました。

私の発表内容は乳房再建における胸部ドレーンの早期抜去の有用性についてでした。乳房再建術において陰圧閉鎖ドレーンは広く使用されていますが、ドレーンの長期留置は感染のリスクを高めるとされています。一方、ドレーンの早期抜去の安全性および有用性に関するエビデンスは限られており、本研究では胸部ドレーンの早期抜去が創部合併症に与える影響を検討しました。2019 年から 2024 年までに組織拡張器、人工乳房、または自家組織による乳房再建を受けた患者を後方視的に解析し、ドレーン抜去を排液量基準で抜去した群（排液量が 1 日 30 mL 未満で抜去）と早期抜去群（排液量に関わらず術後 4 日以内に抜去）の 2 群に分けました。合計 241 例（265 側）を解析した結果、漿液腫の発生率は両群で差がありませんでしたが、手術部位感染は早期抜去群で有意に低いという結果が得られました（15.7% vs. 6.9%、p=0.032）。この傾向は人工物による再建で顕著であり、多変量解析でも早期抜去は手術部位感染の独立した抑制因子として示されました（OR 0.316, p=0.015）。術後 4 日以内の早期ドレーン抜去は漿液腫の発生を増加させず、特に人工物による再建において感染を有意に減少させることを示しました。

自分の発表以外には、再建分野を中心として沢山のセッションを聴講する機会があり非常に有意義な時間を過ごせました。また、学会の合間にニューオリンズの観光も楽しみました。特に The National WWII Museum の、第二次世界大戦・太平洋戦争を米国の視点から振り返る展示は、日本人である私にとっては興味深いものでした。

MOU 枠での発表の機会を与えていただいた日本形成外科学会国際委員会の先生方、また、研究を指導して下さった当科の東野琢也先生、大島梓先生に深く感謝申し上げます。





ASPS Plastic Surgery The Meeting 2025（New Orleans）参加報告

慶應義塾大学医学部形成外科　鈴木 悠史

今回、ルイジアナ州ニューオーリンズにて開催された米国形成外科学会（ASPS）年次学術集会（PSTM2025）に参加させていただきました。学生時代にニューオーリンズの Tulane 大学病院で 1 か月間実習をさせていただいた経験があり、当時の懐かしい思い出の詰まった場所を再訪できるこの機会をぜひ逃したくないと思い、日本形成外科学会から MOU 枠での演題募集メールをいただいた際に、すぐに演題を提出いたしました。

幸いなことに、Global Partner Session の一般演題として口演の機会を賜り、さらに最終日には各領域の Best Abstracts を集めた Encore Session にも選出いただくことができました。米国のみならず世界各国から多くの形成外科医が参加する学会の中で、このように評価していただけたことは大変光栄でした。

今回の学会では、私の演題に関心を寄せてくださった先生方とディスカッションを行い、今後の研究につながる新たなネットワークを築くことができました。また、会期中には多くの国内外の先生方と交流する機会にも恵まれました。特に、同じ Tulane 大学で留学経験のある東京大学の服部先生と 12 年ぶりに病院を外から眺めながら、学生時代からわずかではありますが成長してこの地を再訪できたことを実感し、感慨深い思いでした。

服部先生と Tulane 大学病院を再訪しました。

今回の学会では、同世代の先生方の参加も多く、東北大学の伊師先生、今井先生、東京大学の服部先生、白石先生らとは、毎晩のようにニューオーリンズの喧騒の中でお酒を交わしながら親交を深めることができました。また、ペンシルバニア大学に留学中の出口先生が企画してくださった日本人ランチ会では、国際学会で積極的に発表されている先生方と意見交換を行うことができ、大きな刺激を受けました。

PSTM は再建外科から美容外科まで多岐にわたる発表が行われ、特に脂肪注入や鼻形成に関する最新の知見を得ることができ、非常に有意義な学会参加となりました。今回の経験を糧に、今後も国内外の形成外科の発展に貢献できるよう、研究と臨床の両面で一層努力してまいりたいと思います。

服部先生、白石先生、伊師先生、今井先生とフレンチクオーターにて

PSTM 2025 in New Orleans

米国ペンシルベニア大学　形成外科
大阪公立大学大学院医学研究科　形成外科学
出口綾香

2025 年 10 月 9 日から 12 日にかけて、New Orleans で行われた米国形成外科総会 PSTM2025 に参加してきました。日本形成外科会より MOU 枠でポスター2題、さらに一般演題として Podium presentation1題に採択いただき、発表してきました。

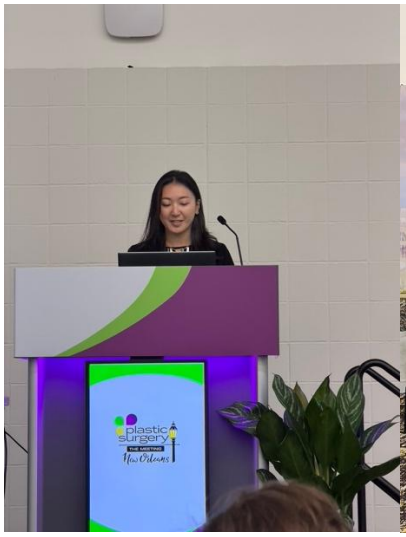
現在私は、米国ペンシルベニア大学形成外科の臨床研究部門にて、Visiting Assistant Professor として留学しております。様々なプロジェクトに携わっておりますが、今回の学会では、Mohs surgery 後の遊離皮弁を用いた頭皮再建（Deguchi AN et al. Free Flap Reconstruction Following Mohs Surgery: Our Approach to Complex Skin Cancer on the Scalp. *J Reconstr Microsurg*）と乳房再建における術中 vs 術後再吻合の比較検討（Flap Fortification: Impact of Intraoperative Microsurgical Intervention on Vascular Compromise in Breast Reconstruction）の2演題をポスター発表をさせていただきました。さらに Podium presentation では、偏頭痛治療 CGRP 関連抗体薬における乳房再建術後の影響：後ろ向きコホート研究(Impact of Monoclonal Antibody Migraine Treatment on Surgical Outcomes in Free Flap Reconstruction: A Retrospective Cohort Study)について報告いたしました。また、学会初日には International Steering Committee member として、ASPS Global Leadership Forum に参加し、各国の形成外科の現状や改善点について世界各国の形成外科医とディスカッションし、非常に充実した貴重な交流会でした。

PSTM を含む米国の学会の多くは、レジデントや医学生が発表をしていることが多いです。形成外科のレジデンシーは、米国内でも最難関といわれているため、形成外科医を目指す医学生、そのレジデンシ~プログラムで切磋琢磨しているレジデントの発表は、非常に洗練されています。また、学会プログラムも若手形成外科医主体のものが多く企画され、特に各施設のレジデントが競い合うクイズ大会(Residents Bowl)はいつも白熱していて、若手世代が学会を盛り上げている雰囲気と勢いを感じました。

さらに、昨年の PSTM に続き、日本から参加した先生方とこちらで活躍されている日本人・日系形成外科医の先生方との交流会を企画しており、今回も10名が参加くだり、楽しいランチ会となりました。New Orleans は、ジャズ発祥の地として知られ、ヨーロッパやアフリカの文化が融合した魅力的な雰囲気の街でした。夜は、リサーチチームのレジデントたちとフレンチクオーターに遊びに行ったり、クレオール・ケイジャン料理を楽しみ、学術面・交流面ともに充実した滞在でした。

世界各国から集まる優秀な形成外科医と交流し、情報を共有できる場であるPSTM の参加は、非常に刺激的で有意義な機会です。今後も多くの国際学会に積極的に参加できるよう、精進していきたいと思っています。

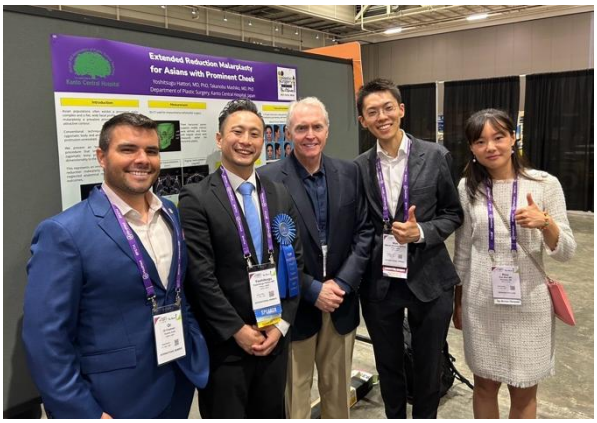
最後に、このような貴重な機会をいただいた関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。



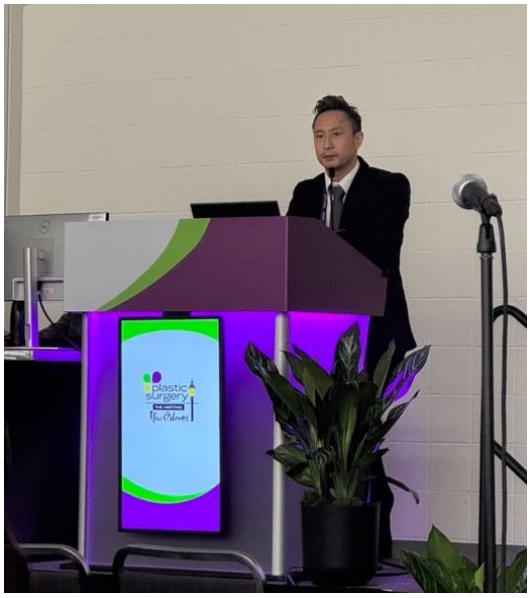
PSTM 2025 参加報告

関東中央病院　形成外科　服部貴続

この度、アメリカ形成外科学会にて MOU 連携枠でポスター発表の機会をいただきました。



“Extended Reduction Malarplasty for Asians with Prominent Cheek”と題し、新しい頬骨骨切りの術式である”頬骨セットバック”の発表を行いました。Reduction Malarplasty は主にアジア圏で行われる手術で、欧米圏では馴染みの薄い術式・概念ですが、その意義と結果を示し、BEST POSTER 賞を頂く事が出来ました。



また、一般応募の Oral Presentation も採択頂き、オトガイ形成に関する発表(Step Genioplasty using Trapezoid Osteotomy)も行いました。Craniomaxillofacial の Session で、整容性を高めつつ長期的な安定性を確保するための“台形骨切りを用いたステップ型オトガイ形成”の有用性について発表を行いました。

学会発表の場以外でも、形成外科をリードする世界の巨匠達と交流できたのみならず、日本の熱いドクター達とも親交を深める事が出来ました。

今回の開催地 New Orleans は、私が医学生の時に留学していた Tulane University のある、非常に思い出深い場所でした。大学や French Quarter といった繁華街など、学生時代の懐かしの地を訪ねる旅にもなりました。

最後に、日形会の MOU 枠でこのような素晴らしい発表の機会を与えていただきました国際委員長の小川令先生および国際委員の先生方、関係各位に深謝申し上げます。